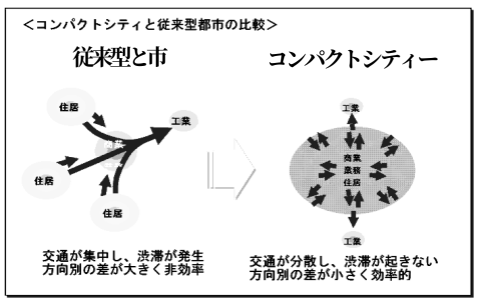
三島のまちつくりはどうあるべきか？

コンパクトシティーを考える

来年度より第４次三島市総合計画が始まる。この先10年を見据えた三島市のまちづくりの最も基本となるものだ。現在、三島駅南口の再開発事業が進められようとしているが、それは三島市の中心市街地のあり方に大きく関わる事業でもあり、失敗は許されない。本当に今の流れでよいのか、コンパクトシティーという考え方もあり、今一度立ち止まり再考の必要もあるのではと思う。

コンパクトシティーとは、「日常生活は歩いていける範囲内でまかない、年をとっても住みやすい街」「酔っ払っても、歩いて帰れる広さの街」。車の使用は抑え、自転車や徒歩、公共交通を中心にして、様々な機能が比較的小さなエリアに高密に詰まっている都市形態をいう。



高度成長期に、地方都市では郊外の宅地化が進み、車社会の到来と共に、郊外へ大型店の進出が進む一方、中心市街地は空洞化し始めた。人口が移動した郊外では農地や緑地の減少が進行し、間延びした区域内での行政サービスは非効率化した。人口減少・高齢化社会の到来により、従来の都市政策からの転換が求められてきた。さらに、都市形態を考慮しなければ深刻化している中心市街地の空洞化や衰退に対処できないと人々は気づき始めた。

都市の機能を徒歩や自転車で移動できる範囲に収め、その範囲内に住民が必要とする各種店舗をそろえ、商店街を作り直す。そうした考えに沿って、高層建築や古い木造住宅の密集する市街地を再開発する。自然環境や文化遺産の保護、地域のコミュニティーの創出など、少子高齢化社会へのきめ細かな対応を図る考えを基にまちづくりを進める。

このようなコンパクトなまちづくりの考えは、90年代後半に一部自治体の総合計画などに限定して取り上げられた。その後、国交省、経済産業省により06年度重点予算要求のなかで再び取り上げられたことで、今日では全国的に「ブーム」とも呼べるほど関心が高まっているという。

高松市丸亀町再開発事業の取り組みも、このような考え方の基に進められたものだ。

弘前大学の北原啓司教授によると、コンパクトシティが提起しているのは、望ましい都市のあり方を、空間の姿から総合的に考えるべきだという。また、公共基盤整備と経済成長を優先してきたわが国の都市政策に転換を促している考え方でもある。

土地利用による立地規制で都市が郊外に向かって無秩序に拡大してゆくのを制限すること。病院などの都市施設が郊外に移転しないように容積率などで利点を与えること。マンション建設の促進などでまちなか居住を進めること。駅周辺、中心商店街などで複合機能再開発を進めること。これらを民間主導で進めること。このような方向が提案されている。

急速に進む高齢化社会が到来する中で、まちづくりのあり方も転換が迫られている。20年後、65歳以上の高齢者の割合が4割を超える自治体は全体の37％と予想されている。

また、地方財政は破綻寸前で、この先さらに厳しくなる。地方交付税は削減され、地価の下落で固定資産税アップは期待できない。住民税も人口減と団塊世代の定年で減少する。一方で高齢社会を支えるコストは増える。

街なかの既存インフラの活用を図るコンパクトシティー構想は、この切羽詰まった財政事情が背景にある。都市機能を極力中心部に集めれば、インフラ維持費やごみ収集などの行政コストも低減できる。

三島市の場合、この先どう考えるべきか。

民間による三島大吊橋構想！

去る12月3日、三島市役所で「民間による、日本一長いつり橋建設計画」についての臨時記者会見が行われた。

事業主は株式会社フジコー。橋を架ける場所は、国道1号線、三島市笹原新田地先、仮称「三島大吊橋（日本一長い人道吊橋）」とのこと。

株式会社フジコーによると、国際観光地箱根を訪れる観光客は年間約2200万人。その何割かでも三島市に呼び込むことが出来ないかと考えていた。これまで市と議会も箱根町との連携を強めていた折、地元出身者より地域活性化のため（仮称）三島大吊橋の事業提案を受けたとのこと。

この事業については、平成20年度より市役所関係課と協議を進めてきたが、事業の妨げとなっていた土地の問題が解決し、地元、笹原新田、三ツ谷新田からも建設推進に関する要望書が市へ提出されるなど、地元の全面的な賛同を受けたことから、今後、建設に向け本格的な協議に入りたいとの考えであるという。

三島市にとっても、日本一の吊橋構想は、塚原フルーツパーク進出計画に続き、箱根西麓地域が、観光・農業振興・雇用創出・税収確保の面において有望な地域であると広く市民に認識されることになるとして、市長をはじめ、市役所関係者は大変喜んでいる。

また、山中城と三嶋大社の間に位置する、この第3の大型観光施設は、箱根からの観光客誘致に大きな力となるとともに、三島市のみならず、伊豆地域全体の産業・経済活性化に大きく寄与するものと考えているとのことである。

事業費30億円、完成は平成26年4月予定。

原発はいらない（23）

平太さんと語ろう」知事懇談会参加報告！

みしま原発を学ぶ会

11月2日は雲ひとつない晴天でした。伊豆長岡「アクスかつらぎ」の会場はほぼ満席でした。

地域で活躍しておられるというゲストの皆さん6人のお話を聞き、それぞれについて知事からコメントされた後、「せっかくですので、傍聴席から質問のある方はどうぞ」と言われました。

農業についてのお話が多かったので、農業と連携した地域分散型の再生可能エネルギー事業ができないか、あるいは温泉地に迷惑をかけない、国立公園内などでできる「高温岩体発電」（地熱発電の一種。原発の本当のライバルは地熱だそうです）というものに世界で初めて成功したそうだが、年間2千万の予算ではとても足りないので、よろしくお願いしたいとまず言いました。原発をやっている電力中央研究所ではあまり予算をくれないのです。

知事が召集された「県防災・原子力学術会議」でも有馬先生が、新エネルギーの開発促進をと言っておられたと記憶しているけれども、静岡県は東海地震の震源域真上に浜岡原発があり、今年末にはウランMOX燃料を使うプルサーマルまで始められようとしている。万が一、放射能漏れ事故があった場合には、農業も観光もあったものではない。風評被害だけでも新潟のように大変なことになる。

今年6月には県内42団体もの賛同署名をもって10団体の代表が、県知事宛に東海地震が来る前に浜岡原発を止めておいてほしいという要請書を提出しているが、知事の手元にちゃんと届いているだろうかとお聞きしました。

知事は開口一番、意を決したように「原発は危険です。」と言いました。しかし必要だと思っている、危険だからといっても新幹線もリニアモーターカーも事故を起こしていないではないか、それに浜岡ではないとのことでした。そして自然エネルギーは推大丈夫であれば、日本中で進していくと言われました。大丈夫という証明になる、有馬先生はノーベル賞候補にもなった偉い科学者で、自分は大変信頼している、その先生が大丈夫と思いました。元自民党議員で自民党関係に人脈が多い有馬先生の原発への自信の根拠をお聞きしてみたいというのだから原発はやめないとのことでした。

ある兵隊の昔話（下）

秋元実

昔、日本の軍隊が陸海軍とも、新しい兵隊や下級の兵隊をどんなふうに扱ったか、戦後書かれたさまざまな書物や上映された映画が、それを証明しました。

戦後、わたしは、明治以来の日本の戦争、特にわたし自身も、野戦重砲の兵隊として参加した太平洋戦争の実態を知りたくて、次から次へと関係図書を買い集め、日夜熟読したのでした。

今、二階の書架を埋めているそれら戦争関係図書は、四百冊は下らないだろうと思います。その中で、今も愛読している本に、次のようなものがあります。

大江志乃夫「天皇の軍隊」・高原友生「悲しき帝国陸軍」・藤原彰「天皇の軍隊と日中戦争」・伊藤桂一「ひまわりの勲章」・村上兵衛「歴史を忘れた日本人」・友清高志「ルソン死闘記」。棟田博「陸軍いちぜんめし物語」・西野留美子「従軍慰安婦」・朝日新聞テーマ談話室、編「戦争」よって、その戦陣の困苦には、ときに、天と地ぐらいの違いがあったのでした。

戦後、自衛隊の幹部になった日本陸軍の旧軍人は、ほとんど、左官級の将校であったことです。

同じ部隊にいて同じ戦闘を体験しても、将校と下士官と兵隊とでは、体験の中身と深さ、そのときの心情が、微妙に異なるからです。ここにあげた十冊にも、階級による視点や体験の相違が、けっこう潜在しているのです。

たとえば、著者の内、棟田博さんは陸軍伍長で分隊長、高原友生さんは、陸軍中尉で中隊長です。出征して、中国や南方で苦労した軍人でも、階級と立場によって、その戦陣の困苦には、ときに、天と地ぐらいの違いがあったのでした。

戦後、自衛隊の幹部になった日本陸軍の旧軍人は、ほとんど、左官級の将校で

読むことです。

こう言ってはなんだけれど、あるいはこうした皆さんは、兵隊の大集団を号令ひとつで自在に動かした、昔の味が忘れられないのでありましょう。しかし、固定した歴史観や政治観に縛られない旧軍体験者のわたしは、現在の自衛隊と自衛官の皆さんに、仲間意識のような親しみを感じるのであります。

わたしはかつて、北駿の第三十四普通科連隊を見学させていただいて、そのとき、身近で見る自衛官の皆さんに、真実、戦友のような一体感を感じさせられたのでありました。

久田二郎主宰
「戦争を語る朝風の会」会員

―冬がくる―

モノクロが静かに伝える学徒兵悲しきまでに銃口揃う

「百万匹の猫」を残して洋子さんジャガーのエンジン噴かして旅立つ
―絵本作家佐野洋子さん逝く―

黙すとき声あげるときわきまえてスーチーさんの白いくびすじ

二万発超えし核を秘め持てるこの地球（ほし）蒼く漂うらしき

休戦が再戦になるあやうさよ半島の冬波音たかし

浅野和子

みしま源氏物語を読む会

と　き：毎月第1・3月曜日（月2回）
午前10時15分～11時45分
ところ：三島商工会議所・会議室
内　容：『源氏物語』　使用テキスト：角川文庫
会　費：月2000円　テキスト資料代・講師料等含む）
※使用テキスト等は会で用意します。
問い合わせ：『源氏物語を読む会』055-972-4953

三島児童文学を語る会　375回
12月例会のお知らせ
日時：12月18日（土）
13時30分～16時30分
場所　本町タワー4F　第3会議室
テキスト松谷みよ子著
屋根裏部屋の秘密」後半
12月のFM（ボイス・キュウ）は、13日・27日に佐藤磨智子さんが　紹介してくださいます。「アンナの赤いオーバー」ハリエットジフェルト　評論社　ちいさいあなたへ」アリスン・マギー　主婦の友
今こそ「読み聞かせ」が大事！
事務局　小嶋利信　堀川尚子　山口当子
連絡先　三島市中央町8－8
TEL　971-3348(山口)

「大逆事件100年」そして今
田中　伸尚（のぶまさ）氏講演会
日時：12月18日（土）18：00~20：30
会場：もくせい会館（静岡市葵区鷹匠町）
資料代　500円
日本が植民地と化していく大きなうねりの中で天皇制国家が生み出した最大の思想弾圧事件「大逆事件」。
100年の年月を経て私たちは何を知り、何を学んできたのか。
＜田中信尚氏のプロフィール＞
1941年生まれ。
朝日新聞記者を経てノンフィクションライターに。
主な著書に『自衛隊よ、夫を返せ！』（社会思想社）『ドキュメント昭和天皇　全八巻』（緑風出版）『反忠一神坂哲の72万字』（一葉社）等、近・現代を鋭く問う著書多数。
＜講演会実行委員会＞
連絡先　T/F　054－643－2394 池田一）
F　054－252－7088 中川弘）

☆☆☆少年の日のロマン☆☆☆
子供に帰って楽しもう。
中高年のエクササイズにも最適！
空中ゴマ同好会にどうぞ
練習日：毎月第2土曜午前10時半から
清水町柿田川公園内
☆練習用のコマは会で用意します。
参加無料
連絡先：972－4953（高月）

次代へのプロジェクト
アフガンへの軍事対応と9条支援
ペシャワール会　中村哲氏　現地の映像
2010年12月20日（月）午後6時45分
本町タワービル4F　会議室
DVD　アフガンへの永久支援のために（NHK）
入場無料　参加者のフリートーク　第55回
みしま憲法9条の会、三島市民講座
連絡先 975-2855 加土井）、971-3348 山口）